

Title	和田博徳先生を偲ぶ
Sub Title	In memory of Professor Hironori Wada
Author	山本, 英史(Yamamoto, Eishi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.4 (2009. 3) ,p.91(459)- 93(461)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20090300-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

和田博徳先生を偲ぶ

山本英史

慶應義塾大学と創価大学の両大学の名誉教授であり、

三田史学会の元会長でもあった和田博徳先生が昨年七月二十八日に逝去された。享年八十六であった。先生は華甲を過ぎてもなお黒々とした御髪を保たれ、いつも若々しいお姿で御活躍されておられたが、御病気になられてからは久しくお目にかかることも適わなくなつていった。

先生は御尊父和田清博士を筆頭に御一族から東洋史学者を輩出した家で育たれた。先生が東洋史学を志されたのは自然の成りゆきだつたのかもしれない。一九四九年

九月に慶應義塾大学大学院（旧制）を修了され、直ちに母校の文学部副手に就任、以後一九八七年三月に定年でお引きになるまで一貫して慶應義塾に奉職された。その後は創価大学文学部に移られ、さらに十四年間にわたつて教鞭を取られた。また、一九七四年から一九九二年まで教鞭を取られた。

での長期間東海大学文学部で非常勤講師を務められた。

先生は慶應義塾大学史学科の開祖である田中萃一郎博士の学統を継ぐ東洋近世近代史を専攻され、慶應義塾大学における一方の伝統である文献史学を一手に引き受けた。しかし、他方で橋本増吉、松本信廣、竹田龍児、前嶋信次ら東洋史学研究室に籍を置いた教授たちから多くを学び取られ、それを御自身の御研究に積極的に活かされた。いま少し先生の代表的な御研究のいくつかを振り返つてみよう。

「百濟の遼西領有説について」（『史学』二五卷一号、一九五一年）、「神功皇后紀の倭女王注記について」（『史学雑誌』六二編一号、一九五三年）などの邪馬台国関係の論考は橋本教授の東洋古代史研究から得た成果だつた。

二号、一九五一年）は卒業論文を発展させ、古代チベットと魏晋南北朝の中国との関係に新知見を加えられたものである。テーマ選択に当たっては松本教授による中国周辺民族史の講義の影響が大きかったといわれる。「嘉慶十三年イギリスの澳門占拠とヴェトナム」（『和田博士古稀記念東洋史論叢』講談社、一九六一年）や「清代のヴェトナム・ビルマ銀」（『史学』三三三卷三・四合併号、一九六一年）など、壮年期に集中して著された一連のヴェトナム研究は竹田教授を中心とする『大南寔録』の講読会の所産であった。さらに「西天阿難功德国と甘巴里國—明と Vijayanagar との交渉」（『史学雑誌』六三編一二号、一九五四年）、「明代の鉄砲伝来とオスマン帝国—神器譜と西域土地人物略」（『史学』三一巻合併号、一九五八年）、「明代における二つの阿丹国—アラビアのアデンと東トルキスタンのホータン」（『史学』四九巻四号、一九八〇年）などの西アジアとの文化交流に関する論考は前嶋教授との交際から生まれたものであつた。

このように、先生の御研究は古代から近代にまで及び、その対象とする領域の広さは瞠目すべきものがあるが、そこには中国と周辺諸国との関係を文献主体に実証されようとする一貫した姿勢があつた。先生は熟年期には明

代の内政史や社会経済史に関心を抱かれるようになり、「里甲制と里社壇・郷厲壇—明代の郷村支配と祭祀—」（『西と東と—前嶋信次先生追悼論文集』）汲古書院、一九八五年）、「明代の匠官と士大夫官僚—工匠出身官僚の輩出とその意義—」（『東方學會創立四十周年記念東方學論集』東方學會、一九八七年）、「明末の承天府における民變—『鄂事紀略』について—」（『創価大學人文論集』一号、一九八九年）などを公にされたが、体系化されないままになつたことが惜しまれる。

先生の東洋史学に関する造詣の深さは漢籍の読書量に支えられていたといつてよい。先生は御自宅・研究室を問わざ時間さえあれば常に漢籍をひもとかれていた。先生の多様な好奇心はそこから生まれたものである。先生が珍しく慶應病院に入院され、お見舞いに行つた時のことである。ベッドの棚にはおびただしい数の漢籍が積まれていたことを覚えている。病院も漢籍を慰みにする入院患者は流石に初めてだつたのではないか。

漢文史料の読み方に関して先生は我々に多くのことを授けてくださつた。我々が学生の頃は明清史といえども漢文史料は版本を主体としていたが、先生は『史料旬刊』と呼ばれる、今までいう根本史料の檔案を活字化し

た史料をテキストに用いられた。この種の史料は多くの上申文を含み、皇帝に上奏する官僚はそれらを引用しながら自分の意見を伝えるもので、カギ括弧などない漢文ではどこまでが引用で、どこまでが官僚自身の意見なのかを判断するのが難しく、一步間違えると意味が全く取れなくなる誠に厄介なものだつた。先生から手ほどきを受けた解釈の仕方がいまその檔案そのものを読むに当たつて大変役立つてゐることは疑いない。

二十二年前、当時の若手研究者を中心として作つた明清史夏合宿の会という学会には先生は常に最長老として出席され、報告者に対して毎回有益な意見を提供してくれださつた。先生はあらかじめ配布されたレジメで引用された史料を逐一原文と照合されて会に臨まれたため、時として報告者さえも気がつかない史料上の矛盾を指摘され、我々はそれにひたすら恥じ入るばかりであつた。

先生は一面では温厚かつ謙虚な御性格であられたが、他面では御自身の信念に対してもかなり頑固なところがあつた。東洋文庫における明代史研究会では史料解釈をめぐつて主催者の山根幸夫氏との間でしばしば激論が戦わされ、横から口を挟む余地が全くなかったとは参加者の一致した証言である。

『清実録』という膨大な史料を利用するに当たつて、私が「索引はないのでしょうか?」と先生に尋ねたところ、先生は強い口調で、「そんなものはありません。未だに永劫あるうはずがありません」と断言された。安易にそんなものに頼ろうとする私を戒めるつもりでおつしやつたに違いない。パソコンで簡単に検索できる時代になつても先生の御言葉は私の心に重く残つてゐる。

もう一つ印象に残つてゐる先生の御言葉がある。先生は大学院入試に不合格になつた私を慰めるつもりで次のように言られた。「試験なんか落ちた方がいいのです。洪秀全を御覧なさい。試験に落ちたからこそ、歴史に名を留める偉人になつたのです」。私はそれを聞き、「歴史に名を留める偉人」にならないためにも次の試験では失敗が許されないと切実に思つたものだつた。

「中国の歴史は未開拓のところが多く、よく分からないというのが現状です。中国の歴史がよく分からないとということは、世界史の大きな部分が分からないとということです。従つて、世界史は未だ分かつていません」。これもまた先生の御言葉として記憶している。東洋史学、とりわけ中国史研究に身を置く後學に授けられた尊い遺言ではなかろうか。